

「ビジュアルメディア EXPO2016」

神谷 直亮

「拡がり続けるビジュアルメディア」をテーマに掲げた「ビジュアルメディア EXPO2016」が、12月7日から9日までパシフィコ横浜で開催された。「国際画像機器展 2016」の併催イベントという位置づけで、非常に小規模な展示会であったが、VR、4K、3D、ドローン、プロジェクションマッピングなど、多彩な機器、システム、コンテンツが集結していた。

まず、最も注目を集めたのは VR と言っ
て良い。この分野の出展者としては、キャ
ノン、UEI ソリューションズ、シンク・デ
ザイン、スタジオ・エムティーフィールド
が挙げられる。

キャノンは、フランスの VideoStitch 社
のカメラシステム「Orah 4i」で撮影した
360 度ライブ VR ビデオを「Virtoba X5」
ヘッドセットを使って、来場者に視聴を促
していた。出展された「Orah 4i」には、4
台の魚眼レンズ付きカメラと 4 個のマイク
が装着されており「画質は 4K 30fps で、
音声は Ambisonic 3D サウンド」とのこと
であった。キャノンが、VideoStitch 社に
目を着けた理由については、「映像を 360
度リアルタイムにつなぎ合わせるソフト技
術に優れているから」と説明していた。

UEI ソリューションズは、「VRider」と
名付けた 4K8K VR 動画ソリューションパ
ッケージを PR した。このソフトの特色は、
複数台のカメラで撮影した映像を、高解像

度の円周動画としてオーサリングし、低コ
ストで VR コンテンツを再生して見せるこ
とができる点にある。実績として挙げてい
たのは、「カラオケに VRider を連動させた
参加型新カラオケシステム」と「高知県の
PR 動画、ぐるっと高知家バーチャルツア
ー」の 2 作品であった。

シンク・デザインは、手軽で低価格な
「QUICK360」の PR に余念がなかった。
その名称の通り、クイック撮影、クイック
配信、クイック視聴がウリである。クイッ
ク撮影は、リコーの「シータ」のような
360 度 2 眼カメラを使って簡単に撮影す
る。クイック配信は、QR コードを使うこ
とでコンテンツを簡単に配信し、ユーザー
によるアクセスを実現する。クイック視聴
は、「QUICK360」と名付けた専用モバイル
VR ビューアを使って手軽に行えること
を意味している。この「QUICK360」ビュ
ーアは、持ち運びが簡単にできる折り畳み
式で、重量はわずか 9 グラムに仕上がっ
ている。つまり、QR コードが入った印刷物
と一緒に「QUICK360」ビューアを配布し
て、まず、このビューアを組み立ててもら
う。次いで、QR コードをスマートフォンで呼
び込んで、ビューアで視聴するという段取
りになる。ブースの説明員は、すでに販売
したサンプルとして「江の島ヨットハーバ
ークルージング体験」と「夏湯温泉 観光
VR～シキオリ～」を挙げていた。

スタジオ・エムティーフィールドは、「VR

動画の企画コンサルティングから撮影、編
集まで行うことができる」と熱心に売り込
んでいた。4K はもちろん、8K 動画 VR コ
ンテンツにも対応できるという。

次いで、3D 関連のコーナーが話題を呼
んだ。3D コンソーシアム、3DBiz 研究会、
立体映像産業推進協議会が、ステージ VR
コンソーシアムを 12 月 21 日に設立する
という予想外の報道発表が行われたからで
ある。この発表内容によれば、3D コンソ
ーシアムの泉邦昭副会長が发起人となって
「映像酔いのない安全で魅力的な VR コンテ
ンツの普及を目指す」という。その名称の
通り、コンサートや舞台などステージ上の
パフォーマンスを主な対象にしており、3D
で撮影して必要に応じて 3D CG と組み合
わせるという制作方法を考えている。つま
り、視聴者の位置を固定して、現実におこ
りうる視点移動だけに制限することで、映
像と身体感覚のずれをなくして映像酔いを
生じさせない VR コンテンツを制作するの
が狙いと思われる。

まだ発足前であったが、展示会場のブ
ースには、ステージ VR コンソーシアムが考
案したという特製のカメラが披露され、こ
のカメラを使って 10 月 29 日に撮影を試
みた「マレック・シュパキエヴィッチ・チ
ェロリサイタル」の映像が、会場の 3D シ
アターで公開されて脚光を浴びた。

カメラについて説明を求めたところ「ブ
ラックマジックデザイン社製フル HD Micro
Cinema Camera を 4 台使っている。シス
テム構成は、上段に 1 台、下段に 3 台のカ
メラを並べ、上段のカメラには韓国のサム
ヤン社製単焦点魚眼レンズ 7.5mm F3.5 を搭
載し、下段に配置された 3 台のカメラには、
オリンパスとパナソ



写真1 キヤノンは、4台の魚眼レンズ付きカメラと4個のマイクを組み合わせた360度VR撮影システム「Orah 4i」を出展して注目的になった。



写真2 ステージVRコンソーシアムは、独自に考案したという特製の4眼カメラを披露して来場者の耳目を集めた。

ニックのマイクロフォーサーズ専用ズームレンズを搭載している」とのことであった。左右2眼ではなく3眼にした理由を聞いてみたところ「センターカメラでフルHD映像を撮影し、その左右

のカメラとの同期をとりながら必要なデプス情報を入れて3D映像にする」との回答であった。今後の課題については、「4Kや8K映像とハイレゾVR音響を組み合わせ、さらなる没入型コンテンツをライブで制作したい」と語っていた。

なお、3Dシアターでは、既述の「マリック・シュパキエヴィッチ・チェロリサイタル」の他に、「Don't Stop the Dance」「秀麗富士」「Aoi～碧～サカナクション」「Work in Progress」が上映された。

この他、3Dのコーナーでは、3DBiz研究会と同会のメンバーが多彩な展示とデモを行った。特に注目を集めていたのは、ギャマンとたしてんの両社が出展した「3D AIR VISION」と名付けたイマジン・ボックスであった。

さらに、4K関連の展示とデモも目付いた。この分野の出展者としては、JVCケンウッド、三友、関東学院大学が挙げられる。JVCケンウッドは、同社特注の36インチ4Kリアプロジェクションシステム「LY-HDR36」を使って、高輝度HDR映像を再生して見せた。再生された映像は乗用車で、業務用途やデジタルサイネージを狙っているように思われた。ブースの説明員は、「車の表面の透明感と反射光のまぶしさ、暗部の見栄えとリアルな質感が忠実に再現できている」と、盛んに強調していた。

三友は、デジタルサイネージを想定した広視野角ガラスレス4K3Dディスプレイ「OAKTAIL 4K」によるデモを行って注目を集めた。レンチキュラー方式を採用しており、「シャープ製4K液晶パネルと3D偏



写真3 三友は、レンチキュラー方式による広視野角ガラスレス4K3Dディスプレイ「OAKTAIL 4K」のデモを行って注目を集めた。



写真4 ジュエは、珍しい深海でのVR撮影が可能なセット（GoPro製カメラ6台搭載）を紹介して来場者の関心を呼んだ。

向フィルター（Xpol）を組み合わせている」と説明していた。

関東学院大学は、市販のジンバルにソニーの4KハンディカムFDR-AX55を搭載して撮影したというミュージックビデオ「ブルーコンパス」を披露した。

4つ目の分野は、ドローンだ。今年には、イデオモーターロボティクス、ジュエ（JUER）、サークルの3社が自慢のドローンを会場に持ち込んでいた。

イデオモーターロボティクスは、Freefly社の「Alta 8」をブースに展示して、熱心な売り込みを行った。「2016 NABショー」で発表され、8月から発売を開始した最新の製品とのことであった。この他、同社は、グライフォン・ダイナミックス社の高品質・軽量のフレームとMoVi M10ジンバルを使って製作したという同社特性の8ロータードローンを紹介した。機体のラインナップとしては、この他に4ローターと6ローターも揃えているという。

ジュエは、自社開発の特殊な360度防振ジンバルを基盤にしたVR撮影用ドローンを紹介した。今回展示されたのは、ブラクマジックデザイン社のUrsa Miniカメラ4台にインタニア社製の魚眼レンズを組み込んだセットで、シネマVR撮影システムとして最適と思われた。この他、同社のブースには、GoProカメラを6台組み込んだ珍しい深海VR撮影セットが展示されており、来場者の耳目を集めていた。

サークルは、Freefly社の「Cinestar 8」とDJI社の「Inspire 1」を紹介した。4K撮影について聞いてみたら「DJIのX5R

カメラをInspire 1に搭載すれば、1フライトで約15分の4K RAW動画の撮影が可能」と答えていた。

最後に、プロジェクションマッピングを忘れることができない。デモを実施したのは、最先端表現技術利用推進協会（表技協）である。ブースでは、表技協が毎年大みそかに行っているという東京・目黒区にある円融寺のプロジェクションマッピングイベントを再現していた。担当者によれば、この他に「今年5月30日に、錦帯橋プロジェクションマッピング 時空の架け橋を行って好評を博した」と語っていた。

変わったところでは、フォーラムエイトが、脳波ドライビングの体験を促していた。「MindWave Mobile」と名付けた脳波計測装置を頭に装着し、脳波で車のアクセルとブレーキをコントロールしながら運転するという非常にチャレンジングなシミュレーションである。

ソリッドレイ研究所は、ブースで最新の「タップトーク2」（床に投射された映像に触れることで反応する映像システム）をPRした。最新を謳った背景については、「赤外線センサーから測域センサーに変えたので、低位置から床面10mをカバーできるようになった」と説明していた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディアジャーナリスト